中国都市部の高齢期の世代間援助に見られる家族戦略

——瀋陽市の事例を通して——

楊 雪

要 約

本稿では、瀋陽市の高齢者とその家族に対する聞き取り調査の中から3つの事例を取り上げ、中国都市部における世代間援助の実態、および親子双方が援助する際に持つ家族戦略を考察した。世代間援助は時代的背景に伴い大きく変化した。現在の高齢者世代は積極的に子世代をさまざまな面で援助しているにもかかわらず、子世代の援助を期待しないことが語られた。一方、子世代には、伝統的な孝行観が依然として強く影響し、特に親から経済的に援助を受ける子供は親への「恩返し」の気持ちが高まる。非経済的な世代間援助が日常的場面において頻繁に見られ、特に子供からの情緒的援助は高齢者にとって重要な意味を持っている。これらの知見からは、市場経済化後の中国都市社会において、家族は「助け合い」を通して、ますます激しくなる競争社会とリスクに適応する過程で、家族間の絆を深めていき、外部社会の援助が求めにくいときに、「自助戦略」を取ることが判明した。

キーワード: 家族戦略 世代間援助 高齢期

2008, 家族社会学研究, 20(1): 57-69

Observations of Family Strategies from Intergenerational Support of the Advanced Age Period in Urban China: Data Analysis of Case Studies Conducted in Shenyang

Yang Xue

Abstract

This case study focuses on intergenerational support between senior citizens and their grown-up children in contemporary urban China. There have been earlier studies done with the exchange theory approach; however, these studies have certain limitations in aspects such as the over-emphasization of the "rational choices," as well as the negligence elucidating other contributing factors such as the constraints of family norm. The purpose of this essay is to bring social awareness to the provident choices and family strategies senior citizens and their children conscientiously make to better serve each other in the rapidly transforming society. Three typical case studies have been used to demonstrate that the financial support from the elders enhances a sense of obligation for children, even if parents give such support without expectations. Through these observations, we can conclude that families support each other to excel in the ferocious social-economical competitions of present-day China, and at the same time this mutually-beneficial relationship will ultimately strengthen the family tie.

Key words: family strategies, intergenerational support, the advanced age period

2008, Japanese Journal of Family Sociology, 20(1): 57-69

よう せつ: 慶應義塾大学大学院社会学研究科

Graduate School of Human Relations, Keio University, 2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345, Japan

I. 問題の背景と課題

人口変動と経済改革に伴う社会変動のもと、現代中国都市社会においては、核家族の増加や、所得格差の増大、職場の「単位」⁽¹⁾による生活保障体制の基盤の動揺による住宅問題、老後保障、医療保障制度の転換、消費拡大、生活水準の向上、また「一人っ子」政策の徹底により晩婚晩産化などが、家族生活に大きく影響している。世代間扶養などをめぐる家族に関する価値が変容し、世代間関係も大きな変化を遂げている。

また、高齢化が急速に進む中国社会において、家族の中で高齢者をどのように支えていくのか、どこまで家族が高齢者扶養に責任を持てるのかが重要な課題となっている。儒教文化の家族倫理や「孝道」の影響で、「家族による老親扶養は、中国の高齢者扶養の主要な方式である」という論点⁽²⁾が、従来、一種の家族イデオロギーとして「当たり前」だと思われてきた⁽³⁾。国家の法律においても、「老親扶養は主に家族に頼り、家族員は老人に配慮し世話すべきだ。扶養者は、老人を経済的に扶養し、生活上の世話をし、精神的に扶養する義務を履行し、老人の特殊なニーズを考慮しなければならない。扶養者とは、老人の子女及び法律によるその他の扶養義務者を指す。……扶養者が扶養義務を履行しない場合は、老人は、扶養者に扶養費の支払いを要求する権利がある」と規定されている（全国人民代表大会常務委員会、1996）。つまり、家族による老親扶養は、老親の権利であり、子女の法定義務だと規定している。

一方、孫の世話や家事の手伝い、「下崗」^{グストラ}にあった子どもに経済的な援助を提供するなど、従来の「扶養される側」というイメージとは異なる高齢者の姿を確認することができる。本稿は、中国都市部に起こる経済・社会変動を背景に、高齢期の親世代・子世代の相互援助に注目し、複雑な世代間援助関係に見られる家族戦略を、瀋陽市⁽⁴⁾在住の高齢者たちとその家族から聞き取りしたデータをもとに検討したいと思う。

II. 世代間援助に関する先行研究の整理

近年の家族研究は、家族行動を合理的行為として説明できるという立場を強めてきた傾向が指摘された（田淵、1999）。とりわけゲイリー・ベッカー（Becker, 1981）に代表される New Home Economics による家族研究は、新古典派経済学の分析ツールを家族研究に適用し、家族の社会学的研究にも大きな影響を与えた。家族研究における多くの実証研究が、家族に関連する行動の合理的性格の析出を意図するようになってきた（Sabatelli & Shehan, 1993）。家族理論における、そうした理論の基本的特徴は、(1) 方法論的个人主義、(2) 個人の動機付けの重視、(3) 行為者が私益（Self-interest）によって動機付けられること、(4) 行為者は合理的であること、である（Klein & White, 1996）。特に世代間援助は、多くの場合、経済行為でもあり、平等な交換関係を前提とし、利己的な動機から解釈する理論的動向が見られる。例えば、中国の世代間援助研究では、Lee et al. による家族援助のモデルが挙げられる。Lee et al. は、高齢者の家族扶養を3つのモデル—(1) Power and bargaining model: 長期的な利益（例えば遺産）と子女の援助の交換、(2) Mutual aid model: 子女への家事や子育てのサポートと子女の援助の交換、(3) Corporate group model: 家族を利益の共同体と見なし、子女への時間、金銭、情緒的投資は、老後のサポートと交換—を通して検討している（Lee, et al., 1994）。

人口高齢化と社会変動の進展につれ、世代間ネットワークや世代間交換研究は中国の社会学界において注目されるようになり、世代間関係に関する研究は多数見られる。陳は、中国都市部において、同居するか否かにかかわらず、経済的・非経済的な世代間支援は普遍的に存在する。子女の老親扶養を促す最も重要な要素は、子世代自身が扶養された時期の記憶より、むしろ成人期以降の経済的援助の有無に左右されると述べ（陳、1998）、また、親世代から子世代への援助が多い

という「世代間傾斜」(「代際傾斜」)の問題も提起され(董, 2002), 中国社会において, 世代間の援助は対等均衡な交換関係ではないことが示唆された。

中国の世代間援助に関する研究は, 親世代から子世代へのサポートや子世代から親世代へのサポートを量化して比較したり, 親の属性や子の属性を検討したりするなど, 定量的手法を用いて, 「交換」すること自体に注目する傾向があるが, 本稿は特にサポートする親の心性や子の心性に注目したい。

III. 家族戦略論の視角

田淵は, 交換理論や合理的選択論による家族へのアプローチは枠組みの論理的明快さ, あるいは簡明さのために, 究明しうる/すべき多くの「社会学的」問題を分析から排除してしまっていることを批判すると同時に, 家族社会学理論は, 「家族」に関連する諸現象について, 合理的選択論の枠組みではとらえきれない側面を分析しうるような理論を, 社会学の他の理論との関連を踏まえたうえで提示すべきであり, 個人が「合理的に動機づけられる」部分と, 「非合理的に動機づけられる」部分とを視野に入れた理論構成が必要になっていると論じ, 家族戦略論アプローチを提示した(田淵, 1999)。

「家族戦略」という概念は, 歴史社会学, 家族史研究の分野における家族研究において多く見られる。家族戦略の社会学理論上の意義について, 西野(1996)は, (1)歴史資料からわかる人々の生活・行動を説明・解釈する際に用いられる, 複数の仮説から構成される社会学的な説明枠組みである。(2)人々の行動が家族外部の社会構造的要因によって決定される側面を含むという点で, 構造的なパースペクティブに立っている。同時に, 家族の能動的な側面を視野に含んでおり, 行為者中心のアプローチを導入している。(3)家族集団が社会を構成する1つの下位システムとして捉えられ, それにより, 他の下位システム間での関連

を分析に取り込む可能性が開かれる。(4)個人の行動を家族集団の枠組みの中で家族集団の集会的な行動を構成するものとしてとらえることになり, 家族システムが個人と社会を媒介する機関の役割を果たす, とまとめた。

「援助」という行為は, 経済行為でもあり, 交換理論や合理的選択論の枠組みから考察する先行研究が多く存在する。一方, 老親扶養は「孝」などに代表される儒教的家族規範と密接に関連し, 合理的計算よりも規範によって制御される部分も大きい行動と考えられている。すなわち, 本稿において, 家族戦略論を用いて世代間援助を考察しようとする理由は, 上記の由縁である。そもそも「戦略」という用語は, 目的を達成するために, 課された制約のもとで複数の選択肢の中から最も有効と思われる手段を選び取ることを指す。この用語の魅力は, おそらく課された制約と「選び取る」という主体性との併存にある。「家族戦略」という概念は, 歴史社会学, 家族史, 経済学研究など諸分野における定義は大枠で定着しているものの, 操作レベルでは曖昧な部分も存在すると言える。だが, 本稿は「家族戦略」概念の理論的考察を目的としないため, 概念の定義について詳しく検討しない。本稿では, 理論的枠組みとして, 主に田淵(1999)の変動する社会における現代家族を分析する家族戦略の視角に依拠し, 事例分析を通して, 市場経済改革後の中国都市社会という課された構造的条件の中で, 高齢者とその家族は, 世代間の相互援助において, どのように主体的選択を行うか, どのような戦略を取るか, を考察していくことが, 本稿の目的である。

IV. 調査の概要

本稿で使用されるデータは, 2005~2006年に瀋陽市在住の高齢者とその子どもに対する聞き取り調査の質的データである。調査対象者の選択は, 職業, 収入, 性別, 年齢, 子との同別居状況, 社会参加状況, 健康状態別に, 瀋陽市在住の高齢者3人(表1)およびその家族である子世代5人

(表2)に聞き取り調査を行った。収入の参考として、中国元対日本円の相場は1元≒15円であり、2004年の瀋陽市の在職人口の平均年収は17,982.53元である(中華人民共和国統計局, 2005)。

インタビュー・ガイドには、高齢者の経済的・身体的・精神的状況、社会的ネットワークのほか、高齢者本人の老親扶養の経験、扶養をめぐる役割分担、孝行観、ジェンダー観など、世代間援助などの項目を設定し、子世代の部分に関して、本人および配偶者の経済状況、家族関係、親との付き合い状況、親の扶養をめぐるきょうだい間の役割分担、親に対する援助、親から受ける援助、孝行観、市場経済化に伴う家族生活に対する影響、自分の老後生活に関する展望などの項目を設定した。また、インタビュー・ガイドに記載された特定のトピックを扱うが、インタビューイに対して回答の仕方を選択する自由、また、自分にとって意味のある他の話題に触れる余地を残して

おり、開放性や文脈情報の獲得に有益であることを考えて、半構造化インタビューの手法を採用した。

V. 考察：中国都市部の世代間援助に見られる家族戦略

1. 世代間援助に影響する社会構造的要因

家族が変動する社会において、どのような戦略を取っているかを検討する前に、社会変動が家族生活に与える影響を整理する必要がある。中国都市部において、市場経済改革に伴い、さまざまな社会変動が進行しており、とりわけ「単位」福祉制度の崩壊は、住民の生活に最も影響が深い。1978年以前の計画経済体制の下では、ほとんどすべての都市住民が「単位」に所属していた。「単位」は、モノやサービスの生産を行う組織であると同時に、従業員に対する生活保障機能も有していた。ところが、1979年より開始された市場経済改革に伴い、かつて「単位」が担っていた福祉

表1 高齢者世代のプロフィール

調査対象者 ⁽¹⁾	趙さん(女性)	李さん(女性)	馬さん(男性)
元の職業 配偶者の職業 夫婦の月収 ⁽²⁾ 健康状態 配偶者の健康状態 住宅状況	工場のセールス 銀行員 2,500元程度 良好 良好 約160m ²	店員 技術工員 900元程度 良好 死別 約55m ²	大学教師 大学図書館職員 4,700元程度 心臓病・白内障 重度の関節炎 約170m ²

⁽¹⁾ 調査対象者の名前は全部仮名である。

⁽²⁾ 収入のデータに関して、高齢者世代のデータはすべて2005年8月調査時点のものであり、中年世代に関しては2006年8月でのデータを使用している。李さんは調査時点で配偶者と死別したため、本人の月収のみになっている。高齢者の収入は基本的に年金収入であるが、李さんの月収は年金収入(420元)とパートの収入(460元)二つの部分から構成される。

表2 子世代のプロフィール

調査対象者	趙さんの次男	趙さん次男嫁	李さんの長男	李さんの次男	馬さんの次女
年齢 職業 本人月収 住宅状況 婚姻・子どもの状況	53 銀行員 3,000元強 約160m ² 妻と同居・ 22歳娘(留学)	53 保険会社員 2,000元強 夫と同居	43 技術工員 約500~600元 李さんと同居 離婚・16歳息子 (専門学校)	40 無職 不明 1K 未婚・ 子どもなし	43 公務員 2,000元弱 97m ² 離婚・18歳娘 (専門学校)

図1 調査対象者の家族構成図

の機能は徐々に切り離され始めている。住宅分配制度の改革、医療保障、養老保障が「単位」の外に出され、「単位」福祉制度は崩壊しつつある。しかし、制度の転換期において、福祉機能を維持し続けた「単位」も存在している。「単位」福祉の存亡によって高齢者を分類すると、「単位」福祉維持層は、収入、医療、住宅、生活福祉など、あらゆる面で「単位」福祉崩壊層より恵まれている。「単位」福祉の存亡は高齢者の公的扶助を左右する最も大きな要因になっていると考えられる(楊, 2006)。

一方、中年世代(子世代)は、中国の世代間格差を研究する劉の分類によると、主に「文革の世代」と「回復の世代」である。

『文革の世代』とは、1946～1955年の間に生まれた世代である。彼らの多くはかつて「知識青年」の身分で農村に行った。彼らの一生の中で文革はもっとも大きな影響を与え、彼らにとってもっとも貴重な、教育を受けるべき10年の歳月を浪費してしまった。このためこの世代の共通した特徴は、次の世代に対し、自分たちが若いころ

実現できなかった夢や希望を託すことである。

『回復の世代』とは、1956～1967年の間に生まれた世代である。彼らは生まれるやいなや、3年連続の自然災害と文革に相次いで見舞われた。彼らの子どもの時代は、幸せの光がまったく射し込まなかったと言ってもよい。現代のように消費物資を享受することも無縁だった。」(劉, 2002)

劉が述べた特徴以外に、この二つの世代の多くは、職業における個人の選択は制限されていた。彼らが就職した当時は、個人が仕事に応募するのではなく、国家によって「分配」されるのであった。文革の後期、農村に下放された「知識青年」は、都市に戻り、統一的に政府によって仕事が決定されていた。そのため、政府機関・事業「単位」に入るか、国有企業に入るか、ある程度「運」によって決められていた。あるいは「単位」制度の下で、親が所属する「単位」の学校に進学し、卒業してそのまま同じ「単位」に所属する事例がよく見られる。李さんの長男、長女は父と同じ「単位」に就職した。さらに、当時、独特な「接班」制度もある。「接班」制度とは、親が退職して、子

女の1人は親の「単位」に就職することができる制度である。この二つの制度によって、親世代の職業が大きく子世代の職業選択に影響した。「知識青年」だった馬さんの長女は、農村から戻り、某工場に勤めていたが、母親退職後、「接班」制度により大学に入り、事務職を勤めている。また、趙さんの次男も同じ経緯で父親の「単位」—銀行に入った。

このような職業の再生産により、「単位」福祉維持層の親は、子世代の多くも「単位」福祉を維持しており、「単位」福祉崩壊層は、子世代も失業や「下崗」にあう可能性が大きい。市場経済の時代に入り、現役世代である中年世代は、経済改革の最も強い影響を受け、「^{リストラ}下崗」や失業する人は大きく増えてきた。そして、当時の職業選択はここで影響が見えてくる。とはいえ、市場経済への変革は、中年世代に大きな機会をもたらしている。市場の自由化によって、過去の厳しい公有制制度は緩和され、個人が起業して富を獲得する中年世代も多く存在する。収入格差の拡大によって、貧富の「両極分化」現象は社会的な問題となっている。

さて、本稿で取り扱う三つの事例において、調査対象者たちはそれぞれどのような社会的状況の中で生活しているのか。趙さん自身の「単位」福祉は崩壊し、医療保障にも加入していない状態だが、配偶者が「単位」福祉を維持している職場から定年退職したため、収入と医療が保障されている。住宅、収入、生活福祉などは家庭単位で共有することを考慮して、趙さん家族を「単位」福祉維持層に分類することが妥当だと考えている。趙さんの長男は知的障害を持っており、過去、某工場で働いていたが、「工齡買断」⁶⁾された後、再就職することができず、収入もないまま現在に至る。現在、親に依存して生活している。次男は趙さんの夫と同じく銀行に勤め、次男の妻は保険会社に勤め、安定した職業と収入を持っている。馬さんは配偶者とともに「単位」福祉維持層であり、経済的に恵まれている。子ども3人は全員「単位」福祉が維持され、経済面で安定している。李

さんは「単位」福祉崩壊層で、生活を維持する程度の収入があるものの、安心して老後の生活を営むことができるほどには充実していない。李さんの夫は腕の良い技術工員で、退職後亡くなる半年前までずっと私有制の工場で稼いだ。社会養老保障金と合わせて、月に2,200元の月収があった。しかし、2004年の9月に健康状態が悪化し、脳血栓で半年寝たきり状態になり、2005年2月に心筋梗塞で亡くなった。李さんの子ども3人は皆「^{リストラ}下崗」にあい、長男は収入が低く、生活上親に依存する場合もある。長女は深圳に出稼ぎし、収入が瀋陽の平均水準より高いが、「娘の子は今、中学校で、お金がかかるのよ。だから、娘は深圳に行った」と李さんは説明した。次男は安定した職業を持たず、親からの生活費の補助に依存する状況である。

2. 変貌する世代間援助

高齢者世代の老親扶養経験および親から受ける援助について質問した。趙さんの両親は亡くなる以前は趙さんの実弟と同居し、主に彼が扶養していた。趙さんは時に親を訪れ、金銭やモノの贈与をしていた。一方、趙さんの夫は農村出身で、両親はずっと農村に残り、夫の実兄と一緒に生活していた。毎年春節の時に、現金を含む生活実用品など、いわゆる贈答品を農村にいる夫の家族に送っていただけで、夫の家族と会うことはなかった。趙さんはどちらの親からもほとんど援助を受けなかった。

李さんの両親は一番年下の息子と同居した。李さんの実父は二十数年前に亡くなり、当時は「単位」がケアする人を出したという。最期の時、きょうだいも輪番で父を看病した。実母は1999年に亡くなり、その前は脳血栓で3年間寝たきりであった。「^{リストラ}下崗」した義妹2人が介護者となり、李さんは経済的に協力した。李さんの夫の両親も一番年下の息子と同居した。李さんの夫の父は、慢性的で寝たきり期間が長かったという。きょうだい6人で、瀋陽にいる次男（李さんの夫）を除き、きょうだい輪番で親の介護をした。李さんの

夫の母は癌で亡くなった。最期、李さんの夫は錦州（夫の実家）に2週間帰って介護することができた。李さん夫婦も共働きのため、子どもが小さい時、長男は1歳から小学校4年まで李さんの夫の実家で育てられ、長女は李さんの実母が育ててくれた。

馬さんは8歳の時、父が亡くなり、母は亡くなるまで上海にいる馬さんの実姉と同居し、実姉が世話をしていた。他のきょうだいは金銭などを送っていた。妻の実父も早くに亡くなり、妻の実母は調査当時99歳で、食事やトイレなどもすべて要介護状態であった。50年以上馬さん家族と同居し、家事や子育てを手伝った。馬さんは住み込みのヘルパーを雇って日常の家事や義理の母をケアしていた。（2006年の旧正月直後、義理の母は亡くなった。）妻は3人きょうだいの長女であり、妹はすでに死亡、実弟も瀋陽におり、よく母を訪れてくる。

趙さんたちの親世代は、特に女性の多くは職業を持たないため、老いて労働能力が喪失し、収入がなくなる親を「養う」こと、すなわち親に対する経済的援助が老親扶養において最も基礎的かつ重要であることが事例において確認できた。三つの事例の中、定職を持っていた李さんの実父を除き、皆老親は子どもの1人と同居し、生活費などをきょうだいの間で分担するパターンである。

調査対象者の高齢者たちが、成人後その親世代から高齢期の経済支援を受けた例はほとんどなく、高齢期における経済的自立度も彼らの親世代よりかなり向上している。逆に現在、親世代から子世代（中年世代）への経済的援助が増えていることが、本調査において判明した。

＊私が彼らを養っているよ（笑）。うん、（長男と）一緒に住むから、彼らのお金は要らないし。旦那は昔、結構儲けたので、月に900元ぐらいの年金で、外でも働いていたし、毎月2000元ぐらいの収入があったよ。……（次男の住宅は）私が買ったもの。言ったよね、旦那は月給2000元以上を稼いだから、次男

の住宅は、旦那と私が買った。今、君たちの言い方では、老人は若い人を養っている。（李さん）

＊娘も大きくなっているから、今留学しているので、相当お金がかかっちゃうのよ。お母さんは我々の生活に対して（雑用の援助をし）、またお金もよくくれるよね。（趙さんの次男）

以上の「語り」から見られるように、親世代から子世代への経済的援助は、大体2種類に分類することができる。すなわち、子世代が「下崗」などの理由で生活上困難であり、親が基礎的生活を維持するための生活費の援助をする李さん家族のタイプと、孫世代が進学や留学する際に、子世代の教育費に対する経済的負担を軽減するための援助の趙さん家族のタイプである。一方、子どもから老親に金銭や物の贈与があるが、それは、生活上の必需費用としてではなく、祝日や親の誕生日などに子女の「親孝行」の気持ちの表現で、経済的な役割より、情緒的援助における役割としている。

また、世代間の非経済的な援助について、過去の高齢者は子世代と同居し、子世代に経済的に依存するため、家事や子育ての面で大きな役割を果たしていた。趙さんの親は、健康状態が良くなかったにもかかわらず、息子一家の家事をできる限り助けていた。馬さんの妻の母も、李さんの母も、同居する子の家事や育児に大きく貢献していた。現在の高齢者世代は、経済的側面ではほとんど子どもの援助を受けていないが、趙さん、李さんは子世代に対し、家事や育児の面の援助をし続けている。同時に子世代も高齢の親に対して、洗濯や買い物など、高齢者にとって不便な家事を助けることが三つの事例で確認できた。

現在の子世代による老後のケアについて、趙さん夫婦は高齢だが、健康状況が良好なため子どものケアを受けたことがなかった。馬さんは入院した時、主に長男が病院でケアをしていた。だが、馬さんの入院期間が短く、2週間程度で、長期的な日常の世話は現在も住み込みヘルパーによって

行われている。長期的なケアの経験がある子どもは、李さんの事例だけである。李さんの夫は半身不随で要介護状態の4カ月間、李さんの次男が昼間ケアし、長男と李さんは夜のケアをするかたちで役割分担をしていた。

3. 世代間援助における家族戦略

家族戦略論の重要な分析課題は、家族にかかわる義務・規範がどのように当事者たちによって組織・動員されていくのか、という点にあると考えられる。以下では、異なる社会的文脈におかれる調査対象者が、お互いの援助に関してそれぞれどのような家族戦略を持ち、家族にかかわる義務・規範を組織・動員しているかを考察していく。

趙さんの事例において、趙さんは「子」としての立場に立つ時、「親の扶養」について、「息子の責任だ」という伝統的な老親扶養規範を強調し、自分は「大した助けにならなかった」と語った。その理由は、過去の貧しい生活水準に帰結し、さらに自分は「娘」であるため、嫁に行ったら「自分の家族」(核家族)を優先すべきという意識も読み取れた。同時に、趙さんは親からの援助をほとんど受けなかった。弟は両親を扶養し、両親は弟の家の家事や子育てを手伝うことを当然視しており、「弟の家族」の中に親が包括され、それと「自分の家族」を区別していた。

* 両親は弟と一緒に生活していたよ。どうせ両親はこの息子1人しかいない、他にはいないのよ。旧社会(1949年建国前)の伝統的観念として、娘が結婚したら、息子が扶養するのよ。彼ら(両親)は息子1人しかいないから、生活は困難だった。その時は、両親がもう弟を頼って生活した。その後、子どもができて、おばあさん(趙さんの母)は家で孫の世話をし、家事や買い物などを手伝った。母は体が良くないの、冬になったら喘息で、咳が酷くて動けない。[健康状態がよくないのに、家事を手伝うの?] そうよ、健康が良くないけど、生活上手伝わないと無理よ。弟夫婦は仕事があるでしょう。おばあさん(趙さんの母)は

家にいて、他にすることがないし、孫の世話さえしないなら、何をしたいというの?(趙さん)

* 私の親は私から何も利益を受けなかった。私は貧しかったから、お金がなかったので、(大した)助けにならなかった。じゃあ(両親は)私の所に来て、私が日常の世話をするなんて、それもできなかった、住むところはなかったから。そして、私は自分の家庭を捨てるわけにはいかないでしょ、子どももいるし。(趙さん)

しかし、趙さんが「老親」の立場に立つ時、彼女の親の時の社会的状況から大きく変化した。夫の「単位」福祉が健全なため、趙さん夫婦は子どもからの経済的援助を受ける必要がない。日常的な世話や病後ケアについて、「自立」できることを強調し、子世代の援助を求めず、「遠慮」する気持ちが読み取れた。

* (子どもに対する扶養の期待は) 別でない。我々は今生活水準が良いから、彼ら(の援助)は要らないよ。彼らは仕事が忙しいし、我ら老夫婦は、自分で自分の面倒が見られるわ。(趙さん)

* 私は健康だから、介護されたことがない。誰か介護してくれるの? 自分が自分の面倒を見る(笑)。その時になったら、その時でまた何とかするよ。(趙さん)

一方、趙さんは子どもに対する援助を積極的に行っている。経済的自立能力のない長男を養い、また、長男の将来のために、民間の養老保険も買っている。次男は、安定する職業と収入を持っており、生活上の困難はないが、娘のイギリスでの留学費用が高いため、経済的負担が大きいと感じている。この費用の一部は、趙さん夫婦が自ら負担することにし、孫世代に対する援助は祖父母がすべきことだと語った。

* (孫娘の留学費用を) 多少出した。孫娘がイギリスに行くので、出さないとだめじゃない。……子どもは向こうで大変そうだし、お祖父

さん、お祖母さんとして、出さないとだめだろうね。(趙さん)

*経済面では、我ら(趙さんの次男夫婦)の負担は結構大きいのだ。老親はね、いつも節約して、子どものために。姑はいつも助けてくれる。老親は今まだ体が良いから、一旦病気になったら、我らの負担はその後だよ。私は姑に言った、「お母さんはもし2,3年後、私が退職してから、もしお母さんが病気になったら、私はお母さんを介護する。」(趙さんの次男の妻)

また、趙さんは日常の雑用などの援助について、「子ども夫婦は共働きで、仕事が忙しい」ことを理由に、「自分は暇だから、できる範囲なら助けてあげる」ことを当然視している。もちろん、日常的な援助に関して、趙さんから一方的なものではなく、次男夫婦も部屋の掃除や洗濯など、高齢の親にとって困難な家事を援助している。親との世代間援助関係について、次男は、「総じて言えば、親から受けるサポートは大きい」と語り、次男の嫁も親からの援助に対して感激の気持ちを「語り」を通して表し、「将来、親の介護をしたい」理由も「孝行」規範より、「いつも助けてくれる」高齢の親から受けた援助に「恩返し」する強い気持ちを読み取れた。

李さんの事例において、李さんの老親扶養経験は、趙さんと違う扶養状況の時代的背景にある。60～70年代の「貧しい時代」に扶養経験があった趙さんに対し、李さんの親扶養経験はすでに市場経済化が始まった80～90年代で、所得や生活水準が向上し、「ギリギリ息子と一緒に食べるだけだよ」の状況から変化した。また、李さんの事例では、「息子扶養」規範の趙さんと違って、きょうだい間の役割分担がより多く見られ、この分担は「お金があればお金を出す、力があれば力を出す」という合理的行動基準を取っていた。

*義妹たちは「下崗」されたし、彼女ら(李さんの弟の嫁2人)もお母さん(李さんの実母)の介護が、嫌じゃなかったよ。私は仕事

があるから、経済的に、多少支援した。お母さんの時はそうだ、彼女らは3年間介護をした。(李さん)

この事例においても、李さん夫婦から子どもへの援助が目立っている。だが、趙さんと同じく子世代に対する経済的援助でありながら、援助の理由となる構造的要因が異なっている。生活上親に依存している子どもに対して、李さんは、『「^{リストラ}下崗」の人が多い』という社会的現実を通して子どもの置かれている社会的状況を正当化し、また、援助する動機に関して、「自分の子どもだから、自分で責任を持って面倒を見なければならない」規範を持ち、自分の援助行為を解釈した。

*私の子ども3人は、みんな良い子で、とても孝行な子だ。有能な子ではないが、私を怒らせることがないし、外でも悪いことをしない。それで結構だ。「^{リストラ}下崗」はね、仕方がないよ。一つの工場は、3000人以上も「^{リストラ}下崗」したし、わが子だけじゃないよ。改革だからね、しょうがないじゃない。子どものせいじゃない。だから、このことについて、私は全然子どもを責めない。子どもは良い仕事をしていたから、収益が悪いのは子どものせいじゃないよ。(李さん)

*今はこんな年だし、家に手を出すのは恥ずかしい。家もそんなに豊かではないから。でもしょうがないよ。例えばの話だけど、お金が1銭もない時、ご飯も食えないほどなのに、それでもまだ面子とか考えるの？ 正直な話、どんなに嫌でも家に手を出さないと(食べていけない)。(李さんの次男)

親から受ける生活費の援助に関して、長男も次男も恥ずかしい気持ちがあるが、「仕方がないこと」として受け止めている。また、李さん家族の親戚や知人の間にも「^{リストラ}下崗」にあう人が多いため、周囲の経験からも自分たちは特別ではないことで外部的要因の重要性を強調した。

子世代の「語り」から、「親が経済支援してくれることに対する感謝」が強調され、同時に、「子

もは親を扶養すべきだ」という伝統的な孝行観の影響が依然として強く読み取れる。そのうえ、親の経済的な援助を受ける子どもは、親に対する「恩返し」の感情がいっそう高まる傾向が見られる。中国の伝統的な高齢者扶養の観点には、老親扶養は子どもが親の扶養を受ける「恩」を返す段階だと認識される。親から受ける援助と親に「返す」援助は均衡的な交換関係ではないが、老親からの経済的援助は、子ども側の「恩返し」意欲を促す可能性が示唆されている。

＊親が僕らを一生養って、あの、(親の姿を)ずっと見てるのよ。親が老いたら、子どもとして何もしないことはありえない。小さい時、親はどのように僕たちを育てていたか、養っていたか、僕も心の中でわかるよ。子どもというのは、親が老いたら養わないと、道理が立たないよ。(李さんの長男)

＊お金がない状況下で、何を持って親を養うの？僕は親孝行する心があるけど、そういう能力はないよ。僕も孝行したい。親に良い生活、贅沢にさせたい。でも自身はそういう実力はない。お金がないから、どうしてもないだろう。僕にとって、よく家に帰って親の側にいることだけが、僕の願いだ。(李さんの次男)

また、李さんの長男も次男も「語り」の中に、何回も「家族の団欒」、「親が大切」、「孝行」の言葉が現れ、「家族重視」の気持ちが表出された。次男は父が要介護状態の4カ月間ずっと父のケアをしており、「親のケアができることは幸せだ」と語った。李さんの「語り」からも、「子どもみんなは父を尊敬している。『父は家の大黒柱で、我々を養っている』といつも言っている」と家における親の権威と子どもの感謝が現れた。高齢者の主観的な動機は別として、客観的事実から見ると、現在の子どもの対する経済援助が、将来の老親のケアと「交換」関係になる可能性も示唆された。ただし、次男は父の介護を積極的に受け取ることができた条件として、強い「孝行」の気持ちと同時

に、定職のない次男は、時間的余裕があることも「介護できる」重要な要素である。次男は経済的に裕福でないため、「親に贅沢にさせてあげる」ことができないが、「常に親の側にいる」を通して、「自分ができる親孝行」を選択した。

しかし、趙さんの事例にも見られるように、親の援助は、必ずしも子どものフィードバックへの期待を伴うわけではない。李さんも、最初「(夫の介護は)次男に期待していなかった。」と語り、都市部の高齢者は、老親扶養における子どもへの期待はそれほど高くなく、本稿で取り扱う三つの事例には、「孝行」規範が強調する「老親扶養は子どもの責任と義務である」ことに対し、実際、この規範を利用して自分の子どもの援助を要求するケースは見られなかった。

高齢者世代の「語り」から、「子どもは仕事が忙しい」をはじめ、「子どもに迷惑をかけたくない」、「子どもも子どもがいるから」など、子どもに介護の期待ができない理由として挙げられ、下の世代の都合を優先する傾向が見られた。現実面では、夫婦共働きの現役中年世代は、老親をケアする時間的余裕がないことは事実である。この意味では、主観的に「期待しない」より、客観的に「期待できない」部分があると思われる。さらに、介護の領域において、公的扶助、地域の相互扶助がほとんど機能しておらず、「自助」の範囲内で解決する問題だと見なされる。この状況下で、新しい介護の担い手が現れた。市場経済改革後、農村から都市へ流入した労働力は介護サービス市場の形成に重要な役割を果たしている。住み込みヘルパーを雇ってケアをする事例が都市部の安定層で増加しており、一種の介護のパターンとして定着する可能性も考えられる。馬さんの事例はその代表となる。

＊我々老人3人だし、子どもは負担できない。彼ら(馬さんの子ども)は毎週土曜日、1回来る。ご飯を作ったり、ヘルパーと替わって、ヘルパーは休みを取る。それで良いよ。我が家はヘルパーがいないと、だめだよ。ヘル

パーは絶対必要だ。前回義母が危篤の時、その前のヘルパーがいなくなって、我が家はもうめちゃくちゃ、どうしようもなかった。誰にも介護できない。親戚などが来たけど、それも長いとしても1日だけで、しばらくして帰っちゃう。どうする？ それで今のヘルパーを雇った。今回の人は結構良い人だよ、義母にご飯を食べさせたり、すべての介護をする。普段、義母が病気で騒ぐときも、彼女も眠らずに世話をする。だから我が家のような家庭は、老人ホームや他の何にしても、全部だめだよ。この方式で維持するしかない。ヘルパーを雇ってこそ維持することができる。そうじゃないと、維持できない。(馬さん)

馬さん自身は「老親」であると同時に、妻の実母と一緒に同居するため、親を扶養する「子」という立場性もあった。「単位」福祉が維持されているため、収入のない妻の実母を経済的扶養することに困難がないが、妻の実母は食事・トイレなどすべて要介護状態であり、馬さん夫婦も健康状態がよくないため、妻の実母を世話することができない。老人3人を介護するという重い負担が、住込みヘルパーによって担われた。

馬さんの場合、家族全員が安定した職業と収入を持ったため、世代間の経済的援助の必要はない。馬さん夫婦は健康状態が良くないが、子ども全員が現役世代であるため、馬さん夫婦を介護する時間的余裕がない。馬さん夫婦も「子どもは世話ができない」現実を受け止め、住込みヘルパーを雇い、世話することを選択し、将来の老親介護のパターンは「住込みヘルパーを雇い、介護する」と考えている。

とはいえ、子世代は老親の世話をすべて住込みヘルパーに任せるわけでもない。馬さんの家において、子ども3人とも親と同居し、よく親の住宅を訪れ、家事などを手伝う。きょうだいの間に「別に明確な役割分担はない」が、「みんな自分の思ったことをやる、自分のポジションを見つける

ことができる。」と次女が語った。きょうだい間の協調は、老親を援助する際に重要な意味を持っている。本稿の事例調査において、子世代きょうだいの間に、細かい役割分担をせず、各自の状況によってそれぞれ柔軟に対応し、行動する傾向が見られる。また、馬さんの事例に、孫世代からの援助も見られた。長男の娘は馬さんが勤務していた大学の大学院に進学し、馬さんの居住する団地も大学の敷地内にあるため、馬さんの孫娘はよく馬さんの家に泊まり、祖父母の世話も引き受けることができる。

VI. 終わりに

子世代の親世代に対する援助は、「孝行」として理解されることが多い。「孝行」とは何かと尋ねたところ、「上の世代から受け取った影響を下の世代へ伝える」、「小さい時から育ててくれた恩を返さなければならない。老親を扶養すべきである」など、高齢者世代とその子世代の間に、「孝行」概念に対する認識には大きな相違は見られなかった。一方、「孝行」の行動基準は時代背景の変化や当事者の階層・職業要因の影響で多様であり、調査対象者たちは、それぞれ経済的援助、身辺介護、情緒的援助といった具体的な方式から選び取り、「自分ができる孝行」をする傾向が見られた。

高齢者世代の親世代に対する聞き取り調査が不可能のため、本稿において彼らの心性を描き出すことは困難だが、現在の高齢者世代の「親」としての心性には、下の世代の都合を優先する傾向が見られた。都市部における核家族化の進行に従って、「子どもは子どもの家族があるから」という「語り」から見られるように、「核家族」規範が浸透しており、高齢者たちは、「子ども家族」に対する「遠慮」の気持ちも見られた。特に、子世代の子どもはほとんど「一人っ子」のため、祖父母の立場に立つ高齢者世代は、子世代が自分の家族・子どもを優先することを認める。さらに、市場経済改革の影響でリストラされた子どもの支援者となり、「子どもはいつまでも子ども」、「自分の子ど

もは自分の責任だ」など、一つの家族集団として経済・社会変動に適応する傾向も見られた。

「献身的」な高齢者像と同時に、現在の高齢者は子どもとの日常的往来によって、精神的に支えられる部分も大きい。「やはり子どもはそばにいてほしい、大した介護や世話ができないけど、やはり側にいるとね。会えるから、気分が良い」という「語り」に、老親の情緒的援助における子の存在意義が表出されている。

一方、現在の子世代は、「^{リストラ}下崗」にあって生活困難な時、リストラ層に対する社会的な就職支援や生活援助はあるものの、その供給は大量に出現したリストラ層の需給を充足することができない。また、安定層でも、有名進学校への進学や留学など、一人っ子をより良い教育をさせるための費用負担が大きく、場合によっては夫婦だけで負担することが困難である。このような教育費用への投入は個人の行為であり、外部社会から援助を求めることができない。外部の援助が利用困難な状況下で、親の援助が最も利用しやすく、家族範囲内で対応する「自助」戦略が見られた。子世代は「子ども」の立場で親の援助を受けると同時に、将来親へ「恩返し」するという心理的機構を通して、自分の行動を意味づけている。親の経済的援助を受けていない子世代にも、伝統的な「孝行」規範が依然として強く影響し、親との相互援助が頻繁に見られ、「親の老後を見る」心性が普遍的に存在する。楊・沈(2000)は、市場経済化後の家族について、「激しい競争社会とリスクに直面する時、再び家族の援助を求め、世代間関係が緊密になり、家族の絆が深まっていく」と論じているが、本稿においても、同じ傾向が見いだされた。

また、本稿ではあまり言及しなかったが、子世代は、老親扶養より、自分の子どもの世話を優先する傾向があった。この傾向は、子世代が老親を援助する時に、どのように子世代の家族戦略に影響するのか、また、子世代がどのように「老親の扶養」と「子どもの扶育」のバランスを取り、かつ自分の行動を動機づけるのか。これらの事柄の

検証・分析は、今後の課題としたい。

少数の事例による事例分析のため、本稿の結論は推測の域を出ないが、今後は本稿の知見を裏づけられるさらなる分析資料を追加し、結論の精緻化を図って研究を進めたいと思う。

【注】

- (1) 「単位」は中国都市部における最も基本的な社会組織であり、経済単位、従業員の生活保障のための単位、支配・行政単位という三つの機能を持つ複合体である。しかし、国有企業の改革は、「企業の純化」を目指して改革が進められてきた。この過程で、従業員との関係においては、「単位」を通じた社会的な生活保障という仕組みが廃止され、「単位保障」から「社会保障」への改革が目指されている。
- (2) ここで注意すべきは、1949年以後、戸籍制度による国家管理によって、人口移動が強く制限され、都市と農村は全く異なる政策対象とされたため、農村と都市の状況は異なることである。農村部には、養老保障制度が建設されていないため、加齢に伴う労働能力を失う場合は、経済の面、ケアの面、精神の面でも家族に依存する。他方、都市部には、建国初期から「退休金」制度が確立された。それゆえ、都市部での高齢者扶養は、経済面での家族の負担が少ない。だが、介護や精神的扶養は依然として「家族に頼る」イメージが強い(楊・沈, 2000)。
- (3) 例えば、中国老齡協会の会長張文範氏は、「中国の養老形態は家族養老と社会養老の結合であり、高齢者扶養は主に家族に頼っている」と述べた(張, 1998)。この論点を引用する文献も多数見られる。また、中国の高齢者扶養理論に最も影響深い費孝通の「フィードバック」理論(費, 1983)も家族による老親扶養論である。
- (4) 瀋陽市を調査地として選択した理由は、2点が挙げられる。第一に、瀋陽市は典型的な重工業都市であり、大型国有企業が集中する都市である。全国で「単位」制度が最も早く出現し、そして持続の期間が最も長いことから、「単位」制度の崩壊に伴う、「単位」福祉の崩壊を考察するうえで意味があると筆者は考えている。第二に、中央政府が遼寧省を年金改革のモデルとして選定し、この改革モデルにより、中国の年金制度の現状をどこまで改善することが可能であるか、を見ることができると考えているからで

ある。

- (5) 企業は減員する際、従業員の賃金水準や職位等を参照し、一年に一定の金額と規定し、その金額×勤務年数で従業員に給付する施策。「工齡買断」は事実上の解雇であり、もちろん、従業員の社会保障も企業が負担しなくなる。従業員の利益の損害になるため、1999年の労働と社会保障部の規定（『關於貫徹兩個條例擴大社會保險覆蓋範圍加強基金徵收工作的通知』）によって禁止されるが、現実において、「工齡買断」を実施する企業は存在していた。

【文 献】

- Becker G. S., 1981, *A treatise on the family*, Harvard University Press.
- 陳 皆明, 1998, 「投資与贍養：關於城市居民代際交換的因果分析」『中国社会科学』114: 131-145.
- 張 文範, 1998, 「堅持和完善家庭養老 積極創造居家養老的新環境」中国老年協會・中国老年学学会編『中国的養老之路』中国労働出版社: 1-12.
- 中華人民共和國統計局編, 2005, 『中国城市統計年鑑2005』中国統計出版社.
- 全国人民代表大会常務委員会, 1996, 『中華人民共和國老年人權益保障法』.
- 費 孝通, 1983, 「家庭結構變動中的老年贍養問題」『北京大学學報(社會哲學科學版)』97: 6-15.
- Klein D. M., White J. M., 1996, *Family theories: An introduction*, Sage.
- Lee Y., Parish W. L., Willis R. J., 1994, "Sons, daughters, and intergenerational support in Taiwan," *American Journal of Sociology*, 99(4): 1010-1041.
- 劉 能, 2002, 「どう変わる? 中国人の意識と暮らし その一: 広がるジェネレーション・ギャップ」『人民中国』594: 18-29.
- 西野理子, 1996, 『『家族戦略』研究の意義と可能性』丸山茂他編『家族のオートノミー』早稲田大学出版, 54-75.
- Sabatelli R. M., Shehan C. L., 1993, "Exchange and resource theories," In Boss P. G., et al., (eds.) *Sourcebook of family theories and methods*, Plenum Press, 385-411.
- 田淵六郎, 1999, 「家族戦略と現代家族の変容」庄司興吉編『共生社会の文化戦略』梓出版, 43-68.
- 董 之鷹, 2002, 「社会転型期的代際関係研究[A]」『中国社会学会2002年年会論文集[C]』: 127-139.
- 楊 雪, 2006, 「市場経済化と中国都市部の高齢者扶養：瀋陽市を一例として」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』(慶應義塾大学大学院社会学研究科) 62: 105-120.
- 楊 善華, 沈 崇麟, 2000, 『城卿家庭：市場経済与非農化背景下的変遷』浙江人民出版社.